

令和 6 年 4 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12966

研究課題名（和文）「没利益」と「贈与」をめぐる西洋思想史の構築

研究課題名（英文）Toward a history of ideas about "disinterestedness" and "gift"

研究代表者

藤岡 俊博 (Fujioka, Toshihiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：90704867

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋思想史における「没利益・無私無欲」の概念の展開を、エマニュエル・レヴィナスの哲学とマルセル・モースの民族学の関係に焦点を合わせて明らかにすることを目的としている。本研究は、「利益」の概念にもとづいて現実主義的・合理主義的な人間観を提示する思想潮流に対して、「利益」の下位概念に縮減されない「没利益」の概念を考察するために、「没利益」の概念と「贈与」の主題の近接性に着目し、哲学と民族学および社会学を架橋する歴史的な視点を提供することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、レヴィナスの思想における「没利益」の概念の重要性を明らかにすることで、レヴィナスの哲学の新しい様相を描き出すとともに、狭義の民族学や社会学の分野を超えてモースの「贈与論」がもつちうる哲学的・思想史的意義を明らかにした点に学術的な意義が認められる。近年、資本主義体制や経済至上主義の問い直しの中で、さまざまな領域で「贈与」の主題が注目を集めており、本研究はそのような社会的関心を学術的立場から補完する意義も有している。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to clarify the development of the notion of "disinterestedness", focusing on the relation between the philosophy of Emmanuel Levinas and the ethnology of Marcel Mauss. To examine this notion that tended to be reduced to a subordinate concept of "interest" in thought trends presenting a realistic and rationalistic view of human nature based on the latter concept, we aimed to reveal a close relationship of the notion of "disinterestedness" and of that of "gift" and offer a historical point of view which can contribute to make a bridge between philosophy and ethnology or sociology.

研究分野：思想史

キーワード：レヴィナス モース 利益 没利益 贈与

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスは、『存在するとは別の仕方』(1974年)を中心とする後期著作において、「没利益・無私無欲(désintéressement)」という概念に依拠して、「他者」との関係に貫かれた主体性の様態を記述している。しかし、レヴィナス自身がこの概念を十分に定義して使用していないこともあり、従来のレヴィナス研究ではこの概念の重要性がしばしば看過されてきた。同時に、哲学研究全体においても、価値中立的な美的判断(カントの「関心なき満足」という美学的用法をめぐる研究を除くと、「没利益・無私無欲」という意味でのこの概念の包括的研究はなされてこなかった。

(2) その背景の一つとして考えられるのは、社会思想・政治思想の分野で「利益」が人間行動の決定的動因として概念的に練り上げられていく過程で、その対抗概念である「没利益」は、利益の否定ではなくその偽装にすぎないとみなされてきた事実である。17世紀のモラリストであるラ・ロシュフコーに代表されるこの見解は、現実主義的・合理主義的な人間観の成立に寄与するとともに、社会の各成員による自己利益の追求が結果として公共の善をもたらすという主張の原型にもなっている。

(3) このように「没利益」の概念を「利益」の下位概念に位置づけてきた思想潮流に対して、本研究は、積極的な意味での「没利益」の概念を抽出するために、同概念と関連が深い「贈与(don)」の概念に注目する。実際、マルセル・モースは記念碑的論考「贈与論」(1925年)の末尾でこの二つの概念の親近性を示唆しているが、「贈与」の概念が、人類学や社会学の領域で新たな調査研究の対象とされただけでなく、哲学・思想の分野でも独自の理論的發展を経験したのに対し、「没利益」の概念の方はほとんど議論の俎上に載せられることがなかった。

2. 研究の目的

以上の背景にもとづいた本研究の目的は、レヴィナスが提示した「没利益」とモースを端緒とする「贈与」が西洋思想史において有する意義を明らかにし、この両概念を軸とする思想潮流を記述することである。主題的な研究対象は以下の項目である。

- (1) レヴィナスの「没利益」をめぐる研究
- (2) 「利益」「没利益」と関連する哲学的主題の研究
- (3) モースの「贈与論」の経済思想・社会思想的位置づけに関する研究
- (4) レヴィナス研究の基盤整備に関する研究

3. 研究の方法

本研究は研究代表者が個人で実施する研究であり、主としてレヴィナスやモースなどの著者の既刊文献および『社会学年報』などの資料の調査・分析によって進められた。明らかになった成果は、そのつど論文や図書、学会や研究会において公表された。

4. 研究成果

以下では、上記「2. 研究の目的」欄に記載した項目ごとに、主要な研究成果について述べる。

(1) レヴィナスの「没利益」をめぐる研究

藤岡俊博「利己愛から利益へ レヴィナスとジャンセニスム」、杉村靖彦・渡名喜庸哲・長坂真澄(編)『個と普遍 レヴィナス哲学の新たな広がり』、法政大学出版局、2022年、pp.244-261。国際シンポジウムでの発表にもとづく本論文では、「利益」や「利己愛(amour-propre)」をめぐる17-18世紀のモラリストの言説の分析にもとづき、パスカル的な「自我」の概念とレヴィナスの「没利益」の思想との近接関係を明らかにした。

藤岡俊博「レヴィナスと社会科学」、レヴィナス協会(編)『レヴィナス読本』、法政大学出版局、2022年、pp.244-250。
レヴィナスと社会科学(社会学、民族学、経済学)との関わりを、特にデュルケーム、モース、マルクスとの主題的な関連に注目して明らかにした。

Toshihiro Fujioka, « Levinas et la pensée économique : aliénation et son au-delà »,

Corine Pelluchon et Yotetsu Tonaki (dir.), Levinas et Merleau-Ponty. Le corps et le monde, Hermann, 2023, pp. 173-185.

マルクスが『経済学・哲学草稿』で分析している「疎外」の概念について、「事物の疎外」「自己の疎外」「類的疎外」「他者に対する疎外」という四つの側面が、レヴィナスの「享受」や「糧」といった主題にも見られることを、おもに『実存から実存者へ』と『全体性と無限』の読解を通じて明らかにした。そのうえで、レヴィナスが死の疎外からの脱出の方途を「贈与の権能の贈与」としての「繁殖性」の概念のもとに構想していることを明らかにすることで、『全体性と無限』とモースの『贈与論』との構造的・内容的類似の可能性を示した。

(2) 「利益」「没利益」と関連する哲学的主題の研究

藤岡俊博「理性の狡智と利益の狡智 ヘーゲル・ローゼンツヴァイク・レヴィナス」、『レヴィナス研究』、第2号、2020年、pp.12-24.

フランツ・ローゼンツヴァイク『ヘーゲルと国家』(1920年)およびフリードリヒ・マイネッケ『近代史における国家理性の理念』(1924年)を補助線とし、ヘーゲルの歴史哲学と経済思想の受容を分析することで、ヘーゲルの思想から「利益の狡智」と呼びうる議論を抽出できることを明らかにした。

藤岡俊博「レヴィナス・享受論の射程 思想史的観点から」、『立命館哲学』、第32号、2021年、pp.1-54.

レヴィナスの「享受」論と、アウグスティヌスの「使用/享受」の概念対との関係に着目しながら、「功利性」の根底にある「使用」概念の思想史的文脈を明らかにした。とりわけ本論文では、『キリスト教の教え』や『神の国』などのアウグスティヌスの著作における「使用/享受」概念の布置を確認したのち、ハイデガーのアウグスティヌス講義と『存在と時間』で両概念がどのように扱われているのかを明らかにしたうえで、アーレントのアウグスティヌス論のうちにレヴィナスとアウグスティヌスを結びつける視座が見いだせることを示した。

(3) モースの「贈与論」の経済思想・社会思想的立場に関する研究

藤岡俊博訳、マルク・オジェ『メトロの民族学者』、水声社、2022年
モースの『贈与論』に依拠しながらパリのメトロを民族学的に分析したマルク・オジェの著作を翻訳し、同書の意義について訳者によるあとがきのかたちで解説をおこなった。

藤岡俊博「湯浅博雄『贈与の系譜学』(講談社、2020年)をめぐって」、『バタイユ・ブランシヨ研究会』、2022年7月31日

湯浅博雄著『贈与の系譜学』(講談社、2020年)の議論を出発点として、「贈与」と関係する「待つこと」の時間性、および、「贈与の系譜学」における「利子」の問題についての提題をおこなった。

藤岡俊博「混ざりあい の思想史に向けて 森山工『「贈与論」の思想』をめぐる報告」、『森山工『「贈与論」の思想』公開合評会、2023年

森山工著『「贈与論」の思想』(水声社、2023年)の議論から出発して、個人と社会の関係を考察する際にモースが用いている「社会的に規定された存在」や「個々の全体」といった概念に着目し、「ホモ・エコノミクス」に縮減されない人間存在の様態をモースが独自の「個人」概念のもとに構想していることを思想史的に明らかにする提題をおこなった。

(4) レヴィナス研究の基盤整備に関する研究

藤岡俊博「レヴィナス青年期のロシア語著作について」、『レヴィナス研究』、第1号、2019年、pp.1-7.

レヴィナスの未完草稿のうち、ほとんど研究対象とされていない青年期の詩や散文について、既刊著作との主題的な連関に着目することで、これらのテキストがもちうる哲学的意義を明らかにした。

藤岡俊博訳、エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』、講談社学術文庫、2020年
レヴィナスの主著『全体性と無限』の新訳を刊行し、レヴィナス研究の基盤整備に貢献した。

藤岡俊博「レヴィナスとロレンス 異教的超越」、『京都ユダヤ思想』、第11巻(2)、2020年、

pp. 79-97.

「下降的超越」の概念に注目することで、レヴィナスの思想と D.H. ロレンスの文学との近接性を明らかにした。

以上の研究成果により、本研究は、レヴィナス研究およびモースの「贈与論」研究の基盤整備に寄与しつつ、「没利益」の概念の思想史的位置づけを明らかにすることができた。今後、本研究を通じて得られた知見にもとづき、本研究が対象としていない思想家や哲学的主題をも視野に入れることで、さらに発展的な思想史研究につなげていくことができると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤岡俊博	4. 巻 2
2. 論文標題 理性の狡智と利益の狡智 ヘーゲル・ローゼンツヴァイク・レヴィナス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 12-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤岡俊博	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 レヴィナスとロレンス 異教的超越	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤岡俊博	4. 巻 32
2. 論文標題 レヴィナス・享受論の射程 思想史的観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館哲学	6. 最初と最後の頁 1-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤岡俊博	4. 巻 1
2. 論文標題 レヴィナス青年期のロシア語著作について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Toshihiro Fujioka
2. 発表標題 Emmanuel Levinas et la pensee economique
3. 学会等名 Levinas et Merleau-Ponty : le corps et le monde (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤岡俊博
2. 発表標題 レヴィナス・享受論の射程 思想史的観点から
3. 学会等名 立命館大学哲学会大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤岡俊博
2. 発表標題 理性の狡智と利益の狡智 ヘーゲル・ローゼンツヴァイク・レヴィナス
3. 学会等名 第2回レヴィナス協会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshihiro Fujioka
2. 発表標題 De l'amour propre a l'interet - Levinas et le jansenisme
3. 学会等名 Le singulier et l'universel - Levinas et la pensee de l'Extreme-Orient (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 レヴィナス協会、渡名喜 庸哲、藤岡 俊博、石井 雅巳、犬飼 智仁、小手川 正二郎、佐藤 香織、長坂 真澄、服部 敬弘、馬場 智一、平石 晃樹、平岡 紘、村上 暁子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 杉村靖彦・渡名喜庸哲・長坂真澄ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍 レヴィナス哲学の新たな広がり	

1. 著者名 Corine Pelluchon et Yotetsu Tonaki (dir.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 311
3. 書名 Levinas et Merleau-Ponty. Le corps et le monde	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------